

星の子

小川未明

青空文庫

あるところに、子供こどもをかわいがっている夫婦ふうふうがありました。その人ひとたちの暮くらしは、なにひとつとして不足ふそくを感じるかんものはなかったものでありましたから、夫婦ふうふうは、朝あさから晩ばんまで、子供こどもを抱だいてはかわいがっていることができました。

子供こどもは、やつと二つになったばかりの無邪気むじゃきな、かわいらしい盛りさかでありましたので、二人ふたりは、子供こどもの顔かおを見みると、なにもかも忘れわすれてしまつて、ただかわいいというよりほかに思おもうこともなかつたのであります。

「どうしてこんなに無邪気むじゃきなのでしょうね。赤あかちゃん目めには、なんでも珍めづらしく見みえるのでしょうね。ほんとうに、こんなときは神かみさまも同おなじなんですわね。」と、妻つまは、夫おつとに向むかつていいました。

夫おつとも目めを細ほそくして、じつとやさしみのある目めを子供こどもに向むけて、妻つまの言葉ことばにうなずくのでありました。二人ふたりは、同おなじように、我わが子こをかわいがりましたが、中なかにも妻つまは女おんなであるだけに、いつそうかわいがつたのであります。

しかし、この世よの中なかは、美うつくしい、無邪気むじゃきなものが、つねに、神かみに愛あいされて変かわりなしにいるとばかりはまいません。美うつくしい、無邪気むじゃきなものでも、冷れい酷こくな運命うんめいにもてあそば

れることがたびたびあります。それはどうすることもできなかつたのでありました。

こんなに、二人が大事だいじにしていた子供こどもが病氣びょうきにかかりました。二人は、どんなに心配しんぱをしたでしょう。あらんかぎりの力ちからをつくしたにもかかわらず、小さな、なんの罪つみもない子供こどもは、幾いくにち日たかか高い熱ねつのために苦しめられました。そして、そのあげく、とうとう花はなびらが、むごたらしい風かぜにもまれて散ちるように、死しんでしまいました。

その後あとで、この二人ふたりのものは、どんなに悲かなしみ、なげいたでありません。自分じぶんたちの命いのちを縮ちぢめても、どうか子供こどもを助たすけたいと、心こころの中で神かみに念ねんじたのも、いまは、なんの役やくにもたちませんでした。

「この世よの中には、神かみも仏ほとけもない。」と、二人ふたりはいつて、神かみをうらみました。

それからというものは、りっぱな家いえも、広い屋敷ひろ やしきも、ありあまるほどの財産ざいさんも、二人ふたりの心こころを満みたすことはできませんでした。二人ふたりは、もし、それらのものを亡なくした子供こどもと換かえることができたら、あるいはそれらのものを投げ出すことを惜おしむものではなかつたかもしれません。どんな貴重きちょうのものも、子供こどもとは、とうてい比較ひかくになるものではないと、しみじみこのときだけは感かんじたのであります。

二人ふたりは、金かねを惜おしまわずに、子供こどものために、美うつくしい、小ちいさな大理石だいりせきの墓はかを建てました。

そして、そのまわりに花の咲く木や、いろいろの草花を植えました。けれど、これだけでは、かぎりない思いやりに対して、その幾分をも消すことができなかったのです。

寒い風の吹く、暗い夜に、女は、いまごろ、子供は墓の下で目を覚まして、どんなにさびしがっているだろうかと思うと、泣かすにはいられませんでした。

すると、男はいいました。

「なんで、あの凍った冷たい地の下などにいるものか。いまごろは、神さまにつれられて天国へいつて遊んでいる。」といいました。

「そうでしょうか？」

「そうとも、天国へいつて遊んでいるよ。」と、男は答えました。

「そんなに、遠い、高いところへならいかれませんが、もし歩いていけるところなら、幾千里、遠い、遠く国のどんなさびしい野原でも、子供がいることなら探していきますのに……。」と、女はいつて、泣きつづけました。

二人は、もう、ただ子供の死んでいつてからのしあわせを、いまでは、思うよりほかに途はなかつたのであります。

そのとき、ちようど、過去、現在、未来、なんでも聞いてわからないことはないとい

うらなしや
う占い者がありました。

おんな
女は、さつそくその占い者のところへいつて、自分の死んだ子供のことをば見てもらい
ました。占い者は、死んだ子供の過去、現在、未来を見て語りました。

「あなたがた二人には、長い間子供がなかったが、信神によつて、子供が生まれました。
けれど子供は、まだこの世の中にくるのには早かった。早いというのは、この世の中があ
まりに汚れすぎているのです。それでもう一度、星の世界へ帰ることになりました。しか
し、短かつたけれど、この世の中に出てきたうえは、苦行をしなければ、ふたたび天
国へ帰ることはできません。」

いま、あなたの死んだお子供さんは、高い山の頂に、真つ赤な小さい花をつけた草にな
つていられます。いまごろは、山には雪が降つていますから、雪の中にうずもれています
が、そのうちに神さまのお召しによつて、星の世界へ帰られます。この後、あなたがたの
信神によつては、もう一度この世の中へ出てこられないものでもありません。」
うらなしや
占い者は、このようにいいました。

これを聞いて、二人は、わが子に対してあれほどまでかわいがり、また大事にしたけれ
ど、まだ足りなかつたか？ まだ二人の真心は、通じなかつたかとなげきました。女は、

夜、外に立つて、月のさえた、青い空をながめました。そして、いまごろ、高い山の上の雪の光る下に、草となつてふるえている、わが子の傷ましい運命を思いました。

いまから、すぐにも、彼女は、旅立ちをしてその高い山に、雪を分けて登つてゆくと思いましたが、もとよりどこに草がうずもれているか知ることができなかつたのです。このうえはただ、もう一度信神の力で、子供を自分の手に帰してもらうよりほかに、どうすることもできないと知りました。

彼女は、その日から毎日、神に願をかけて、「どうか死んだ子供が、もう一度帰つてきますように。」と、宮や、寺へいつて祈つたのであります。

こうするうちに、春もだんだんに近づいてきました。しかし、まだ木が芽ぐむには早く、風も寒かつたのであります。ただ雲の切れ目に、ほんのりと柔らかな日の光がにじんで、なんとなく、なつかしい穏やかな日がつづくようになりました。小鳥は、庭の木立にきて、よい声でさえずつていました。

日がたちましたけれど、彼女の子供を亡くした悲しみは、ますます鋭く、胸を刺してたえられなくなつて、彼女は、毎日のように子供のお墓にお詣りをしました。そして、どうか、もう一度生まれ変わつて帰つてくるように祈りました。

ある夜のこと、女は、不思議な夢から、驚いて目覚めました。

「おまえが、それほどまで子供をかわいがるなら、もう一度あの子供をかえしてやろう。明日の晩に、おまえは独りで、町の西の端に河が流れている、あの河を渡って、野原の中にいってみれ、おまえの子供が、なにも知らずに遊んでいるから……。」

こういって、見なれない、白いひげのはえたおじいさんが、あちらの方を指したかと思うと、目がさめたのであります。

そのことを彼女、朝になつて、夫に告げました。

「それは、おまえが平常死んだ子供のことばかり思っているから、夢を見たのだ。そんなことがあるものでない。」と、夫はいいました。

しかし、女は、どうしても、昨日見た夢を忘れることができませんでした。きつと神さまが私のお願いをかなえてくださったのだろう。とにかく自分は夜になったら、野原にいってみなければならぬと決心しました。

せんだつて降つた雪は、まだ町の中にも消えずに、そこそこに残っていました。彼女は夜になるのを待っていました。その夜は、いつになく空が清らかに晴れて、青くさえたうちに星の花のごとくきれいに乱れていました。その一つ一つ異なつた色の光を放つて、

輝かがやいていたのであります。彼かのじよ女にょは、寒さむい風かぜが吹ふく中なかを歩あるいて、町まちの西にしのはずれにいたり
 ました。そこには、大おおきな河かわが音おとをたてて流ながれていました。あたりは、一たい面めんに煙けむるよう
 青あお白しろい月の光つきひかりにさらされています。この河かわのふちは、一たい帯たいに貧ひん民みん窟くつが建たて込こんでいて、
 いろいろうの工こう場じょうがありました。どの工こう場じょうの窓まども赤あかくなって、その中なかからは機き械かいの
 音おとが絶たえ間まなく聞きこえてきました。そして建たてもの頂いただき
 青あおい空そらに、毒どく々どくしい濁にごった煙けむりを吐はき出だしているのであります。
 彼かのじよ女にょは、ある工こう場じょうの前まえでは、多おほくの女じよ工こうが働はたらいているのだと思おもいました。また、
 鉄てつ槌づいの響ひびいてくる工こう場じょうを見みては、多おほくの男おとこの勞ろう働どう者しゃが働はたらいているのだと思おもいまし
 た。その人ひと々びとは、みんな、このあたりのみすぼらしい家いえに住すんでいるのだと思おもったとき
 に、彼かのじよ女にょは、自じ分ぶんたちはどうしてここに生うまれてこずに、金かね持もちの家いえへ生うまれてきたか、
 しあわせといえ、そうであるが、そのことが不ふ思し議ぎにも思おもわれたのであります。
 こころを離はなれて、だんだん寂さびしい野の原はらにさしかかると雪ゆきが深ふかくなりました。手て足あしは寒さむさに
 凍こごえて、ことに踏ふむ足あしの指ゆび先さきは、切きれて落おちそうに、痛いたみを感じかんじたのであります。
 どこを見みましても、あたりは、灰はい色いろの雪ゆきにおおわれていました。そして、あの天てん国こく
 で聞きこえるであろうような、よねい音いろ色きも、また輝かがやかしい明あかりもさしていませんでした。

彼女かのじよは、せつかく子供こどもにあえると思おもつて、苦痛くつうを忍しのんで歩あるいてきたのでした。

彼女かのじよは、葉はのない林はやしの中なかに入はいつてゆきました。そこにも明あかるいほど星ほしの光ひかりはさしていません。

「どこに、私わたしのかわいい子供こどもがいるだろう。」

彼女かのじよは、こう思おもつて、灰色はいいろの世界せかいをさがしていました。

このとき、すこし隔へだたったところに、黒くろい人影ひとかげが人のくるのを待まっているように立たっていました。彼女かのじよは、その方ほうに歩あるいてゆきました。すると、髪かみの毛けを乱みだして、やせた女おんなが子供こどもを抱だいて立たっていました。その女おんなは泣ないていました。彼女かのじよが近ちかづくとき、みすぼらしいふうをした女おんなは、

「どうか助たすけてください。」といました。

彼女かのじよは、もつと近ちかづいて、よくようすを見みますと、この工場こうじょう町まちに住すんでいる貧びんぼ乏うな若わかい女にようぼう房ぼうでありました。

「おまえさんは、こんなところに立たつて、なにをしているのですか？」と、彼女かのじよはたずねました。

すると、やせた貧ますしげな若わかい女おんなは、

「私たちは、この子供を養つてゆくことができませぬ。それで、だれも、もらつてはくれませぬから、かわいそうですけれど、ここへ捨てにやってきましたのです。けれど、やはり捨てられないのでらつてくださる人のくるのを待つていました。」といいました。

彼女、これを聞くとびつくりしました。

「まあ、こんな雪の上へ、子供を捨てる気なんですか。」と、やせた女を見すえました。

やせた女は泣きながら、

「奥さま、私たちは、この子供があるばかりに、手足まといになつて、どんなに困つていますか、どうかお慈悲をもつて、この子供を育ててくださいませんか。」と頼みました。

金持ちの妻は、心の中で、不思議なことがあればあるものだと思ひました。

「まあ、どんな子供ですか、私に、見せてください。」といいました。そして、星の明かりに照らして、やせた女に、抱かれています子供の顔をのぞきました。星の光は、下界をおうた雪の面に反射して、子供の顔がかすかにわかつたのであります。けれど、その子供は、彼女が探している自分の死んだ子供ではありませんでした。

「この子供は、私の死んだ子供じゃない。」と、彼女はいいました。

やせた女は、しくしくと泣いていました。そのようすは、いかにも哀れに見られました。「奥さま、どうかこの子供を育ててくださいませんか。そうしてくだされたら、私どもは、どんなに助かりましょう。」といいました。

金持ちの妻は、私がかれほどまでにせつない思いをして、神さまに願っているのも、みんな死んだ自分の子供がかわいいからのことだ。自分の死んだ子供が、永久に帰ってこないものなら、なんで、見ず知らずの人の子供を苦勞して育てることがあろう？ 私はいくまで、私の死んだ子供を神さまから返してもらわなければならぬと考えました。「私は、いま自分の子供を探しているのです。それが見つかるまでは、知らない人の子供をもらうことはできません。」と、彼女は断りました。

やせた女は、絶望して、ため息をついていました。

「奥さま、子供はみんなかわいいものでございます。しかたがありません。私は、またこれから、この子供を育ててくださる人を探さなければなりません。」といって、やせた女はしおしおと、彼女の前を離れて雪の上をあちらに歩いてゆきました。

彼女は、このとき、女のいったことをよく考えてみました。そして、だんだん遠ざかってゆく哀れな女の姿を見送りながら、もう一度、あの子供の顔をよくながめて、どこか

死んだ自分の子供の顔つきに似ているところがあつたら、もらつて育てようかと思ひました。

しかし、こう思つたときは、もう遅かつたのであります。もはや、どこを探しても、やせた女の姿は見えませんでした。

雪の上を、空の星の光が、寒そうに、かすかに照らしていました。彼女は、寒い身に
しみる風にさらされながら、なお、死んでしまつた子供を探して歩いていました。

その夜、遅くなつてから、彼女は疲れて、空しく町の方へ歸つてゆきました。

この二人の夫婦は、それから後、長い間、子供というものがなく、さびしい生涯を送つたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「婦人公論」

1923（大正12）年1月

※表題は底本では、「星《ほし》の子《こ》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

星の子

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>